中本 潔先生との旅

熊本での熊高四五会卒後五十周年の折や年賀状のやり取りで「いつか富士を見に静岡へ行ければいいなー」は「いざいざ、奈良」とまでは言わないが、先生と私にほんわかと浮いた雲でした。

二〇二五年明けから「静岡の旅」を計画し、電話をすると「人生最後のイベントで楽しそう」と声はいつものように元気な様子、では、桜までは欲張らずに人込みを避けて、およそ四月上中旬二泊三日ぐらいで計画しましょう、となった。

たまたま静岡に私を含めて中本先生が共通項の四人がいる。これも何かの縁。メール会議で「二〇二五春、静岡の旅」が決まった。

四人、振り返れば、十年程前、静岡市医師会忘年会で久留米育ちの古賀震さん（静岡県立大学）と同じテーブルになったことが事の始まり。私は問われて熊高卒というと「くまたかですね、妻もくまたかです。先生の後輩です！」ときた、これは奇遇です、とお酒で賑やかな会場から架けた携帯で挨拶となった。

私は呼吸器外科の臨床に加えて病院のトリアージ訓練や被災地への支援、DMAT立ち上げなど行っていたが、古賀さんからお声がかかり静岡県立大学看護学部の災害時医療の講義に出向いた。そこへ「私は熊本高校から菊池高校へ来られた中本先生の教え子です、先生から聞いていました！」と、荒井孝子さん（看護学部）縁です。数年後、講義に行くと同じ学部の教官竹熊麻子さんが「私も中本先生の教え子です、荒井さんと同級生です」なんと、桃太郎おとぎ話ではないか！

携帯で挨拶した古賀由紀さんは「熊高1年のときに中本先生に英語を教わりました。講義は音楽が流れるような優雅な時間でした。夏の補修は原著の訳で、その頃の私には難し過ぎたのですが、今思えば何と贅沢な事だったのか。中本先生のご記憶にあれば嬉しいです」とのこと。伝えると中本先生はすぐに記憶の箱から旧姓の女子高生を取り出されました。

ということで由紀さんが診療を休むことができる週末に熊本から静岡への新幹線の旅のツアーコンダクター役を担当することとなった。

旅はいよいよ今週末となったが、初日の4月十一日金曜日の天気予報は曇りのち雨。雨か、ん！！

これはこれでいい！　金曜の雨は願ってもない lucky rain、富士の高嶺は雪となる、土曜の朝は絶景が期待できる。「静岡の旅　プランB」に変更した。参加者は教え子四人とその家族三人、それぞれの都合で参加できるところに参加することとなった。

二〇二五年四月十一日（金）静岡は朝からどんよりとした曇り空となった。熊本から静岡までのさくら・ひかりの車中で由紀さんからの話を楽しまれた中本先生を静岡駅で迎えて市内の旅は始まった。

安倍川餅は駅の土産売り場に出まわっている店舗のものがポピュラーとなったが、元祖は東海道五十三次府中宿（いまの静岡市）の西の境界である安倍川の手前にある石部屋である。商いを拡げる気がないのか、風情があるこじんまりした店の前に車を止めて餅を買って、安倍川を渡り、丸子宿へ着いた。

表に屋号が付いている家並みの旧東海道をぶらぶら西へ向かって歩くと広重の浮世絵を髣髴とする古民家移築の丁子屋に着いた。表に芭蕉の「梅わかな丸子の宿の　とろろ汁」の句碑がある。東海道膝栗毛の弥二さん喜多さんは店主とおかみさんがけんかとなったとばっちりでとろろ汁が食べられなかったが、私たちは着いた時刻が昼の営業時間外だったのでとろろ汁は味わえなかった。店先の赤い敷物の縁台に腰かけて、のんびりと街道を眺めているとお店の人が、「どうぞ中に入ってください」と案内してくれて、古風なつくりの店内や趣のある調度品などを見ることができた。

この日の夜には旧東海道に面する乃だ屋に全メンバーが勢ぞろいした。すじ肉や黒はんぺんなどの濃い味のおでんに青海苔や削り節をかけていただく、これが静岡おでんのスタイル。もちろん静岡といえば、まぐろの刺身も。

眺めは朝。二日目は朝早くから車で一路、三保への ツアーを開始した。私が静岡へ初めて赴任したのは一九七九年だが、時折、景勝地・三保の松原を訪れていた。当時、観光客は多くはなく、少しずつ寂れてきているのを感じていた。なでしこジャパンがW杯で優勝したころは砂洲にずっと続く松の根元に可憐なでしこが咲く、人がさほど多くない松林と海辺の散策道だった。しかし、時を経て、富士山に関連する地として世界遺産に認定されて以来、観光地としての整備が改善され賑わうようになり、この日もそれなりに多くの人が来ていた。羽衣の松から砂場を歩いて海辺へ歩いて、東を見上げると砂洲と海の向こうに白雪の富士を見ることができた。

三保真崎の海から車で日本平ホテルへ向かった。6階のアッパーラウンジからは、テレビドラマ‥華麗なる一族のロケ地にもなった広い芝生の向こうに清水港、さらに遠くにどっしり嶺に雲を従えての白雪の富士の眺めを楽しみながらの楽しいランチとなった。

丸子、とろろ汁の丁子屋

ランチの後は屏風谷越えのケーブルカーで久能山へ到着。駿河湾を眼下にする要害の山で静岡に隠居した大御所家康がこの地に自らの墓所をと、決めたところである。日光東照宮よりこぢんまりとしているがそれなりに絢爛な国宝久能山東照宮を見て廻って、次は奥に霊廟、ん？　病院などの階段は建設時期が昭和だと一段約十八センチ、高齢者が増えてきた昭和の終わりから平成だと約十五センチ、ところが霊廟までの石段は優に二十数センチ、これがそれなりに続く。筋トレには向いているが少々こたえるし、帰りの下り石段はややリスクか、ということで「墓までは見ず」の選択となった。

久能山東照宮　荒井さんとともに

十五代将軍徳川慶喜は一八六七年に大政奉還したが、鳥羽・伏見で敗北し、江戸城開城後、水戸を経て一八六八年、駿府に転居を命じられた。江戸からは勝海舟らリーダーシップも含めてリストラになった一万人余が府中へ移住となったらしい。当時は謹慎・恭順がキーワード。廃藩置県を前にして駿府または府中といわれていた地名の改称が藩庁で協議され、近くの賤機山にちなみ賤ヶ丘といったんは決まったが藩学校頭取の向山黄村が時世を思い土地柄を考えて静ヶ丘即ち「静岡」を提案して決まったと市役所近くの碑文にある。出すぎてはいけない、がモードの街になった。

この夜は慶喜公が二十年過ごした屋敷跡でその後、日本料理邸となった浮月楼に全員集合した。政治と世の変化から離れた余生を送った最後の将軍が使った大きな前輪に小さな後輪の自転車や凝ってあちこち撮りまくっていたカメラ、書、などが置いてある。

静岡の旅―参加者一同、浮月楼の庭にて

旧池高校の教え子、荒井さん、竹熊さんとともに―三保真崎にて

灯りでぼんやりと照らされた池をぐるりとまわる庭の夜景と散歩を楽しんだ後、離れの和室での晩餐会で打ち上げとなった。

三日目、再び、ツアーコンダクター由紀さんと熊本へのひかり・さくらで熊本着。先生の元気な声の到着確認。

私は夏に熊本で先生と再会したが、「旅の後、疲れるどころか元気になった、東海道膝栗毛の原本も読破した」とのこと、よかった、よかった。

この段、これにて閉幕。

（八室　千原 幸司）

熊高四五女子会・茗花会(めいかかい)
―ご紹介とお誘い―

二〇二五年の長い長い夏がようやくおわった十月末ですが、皆様お元気でおすごしでしょうか。

三年五室だった加藤祐子です。「熊高四五女子会（茗花会(めいかかい)）」を二〇二四年三月に立ち上げました。ご紹介と、お誘いをいたします。

（一）設立のいきさつ

二〇二三年夏に京都で開催された「川床同窓会」に、四五会女子が五人参加しましたが、同窓会後に「女子会」を作りませんかと相談。その後熊本の四五会事務局の迫さん方へ相談し、女子でメールを登録されている三三名の方々へメールでお呼びかけしたところ、十一名の方から参加希望の返信を頂きました。

なぜ、女子会を？という質問もありました。「十六～十八歳、素晴らしい青春時代の三年間を共にした女子達に（当時入学は八十名ちかくでした）またお会いしたい！！過ごしてきた人生を語りあえれば！」こんな思いだったでしょうか。

（二）熊高四五女子会の現状

参加希望された女子十一名は、関東、関西、九州とお住まいが広範囲だったのでまずはZoomでやりましょうと、二〇二四年三月八日（世界女性デー）に合わせて、「熊高四五女子会は船出しました」とZoomで乾杯を。その年の二月に馬場朝子さんが、「熊日出版文化賞」を受賞されたのでZoomで乾杯お祝いを。懐かしい顔かおで盛り上がりました。

その後、何回かのZoom開催でお会いしましたが、二〇二五年五月十七日に初の顔合わせての同窓会を、熊本在住の方々のお世話を頂き、熊本日航ホテル二階桃季で開催し六名と仕事の間に少し参加の一名で、二次会は一階喫茶室（記念写真）で楽しくおしゃべりができましたね。まだ、なにか仕事や地域の活動を続けている人が多かったです。

（三）これから

現在（二〇二五年十月）十三名の会となりました。今年は熊本で開催したので、来年は関西あたりで開催できたらと思いますが、まだ決まっていません。以下は最初のご案内文です。これから参加してみようかと思われる女子の方、是非加藤までご一報ください。

……次頁へ続く

旅人になった中本先生
付き人の千原